

詞に、無分別入におちよと、この類の人のことなり、

人之生也柔弱。其死也堅強。萬物草木之生也柔脆。其死也枯槁。故堅強者。死之徒。柔弱者。生之徒。

〔解義〕 すべて人の生る時は、其體屈伸も自由にして柔弱なり、その死したるときは、其體堅強なり、萬物草木の生るときは、柔脆なるものなり、その死れたるときは、堅強なり、柳の枝に雪折れなしと云も、生にてしなやかなる時のことにて、枯木となりては、堅強にして寸々にも折るべきなり、かゝる道理を以てみれば、凡そ堅強は死する方のことなり、柔弱は生くる方のことなり、

是以兵強則不勝。木強則共。

シタツミトナル

〔字訓〕 共はくみ合はするの意

〔解義〕 是を以て兵強きは、威を奮ひ、人懐かずして、終に勝を得ものなり、木の強きは、土臺となり、棟となり、種々柱を組み合はせたる下となりて、壓さるゝものなり、

強大處下。柔弱處上。

〔解義〕 物の常理に於て、強大なるものは在下、樹木の根、柢は、強大なるが故に下にあり、柔弱なるものは在上、樹木の枝葉は、柔弱なるが故に上にあるなり、以上本文を説きたれば、後藤又兵衛が虎をきる、きることはきりたり、仁者にはあらず、佐々木三郎が藤戸の海を渡す、渡すことは渡したり、智者にはあらず、これみな人の下となりて使はるべき一騎がけの武者にして、上に立ちて

人を使ふの任に勝ふる人にあらず、かく云へば武勇いかんと云者あらん、そは又別のことなり、こゝは只人の上となり、武勇の士を使ひ玉ふ人の心得を教へたるなり、

七十七章

〔章意〕 この章、天道の妙を述べて、聖人天に法とり用を制し玉ふことを云なり、

天之道。其猶張弓。與。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。

〔解義〕 天の道は、それ猶弓を張るが如きか、弓を張る者は、弣の高さを抑へ、弣の下きを揚ぐるなり、天の道の萬物に於けるも、高きものは抑へ玉ひ、滿は損を招くなり、下れる者を舉げ玉ひ、

謙は益を受くるなり、有餘ものは損し、玉ひ、月盈ては缺くる如し、不足なる者は補ひ玉ふ、初月の漸々に増す如し、

天之道。損有餘。而補不足。人之道。則不然。損不足以奉有餘。

〔解義〕 天の道は、有餘ものは損し、不足なるものは補ひ玉ふなり、然るに人のする道はそれと異なり、貧窮せる民よりいよいよ取り上ぐるは、不足を損するなり、君は富みて倉庫に財有餘を、いよく取り上げて身に奉がふは、有餘に奉するなり、

孰能損有餘。以奉天下。唯有道者。

有餘上。今本無損字。今從古本。

〔解義〕 今戰國の折柄にして、無道の世なり、誰かよく倉庫に有餘財を以て、天下萬民を恤むものあらん、財散すれば民聚る、天

下の人心歸服して、その國いよく繁昌なるべきなり、あゝこれたゞ有道者のみなしつべし、かゝる今の世には、有りがたかるべし、

是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢。

〔解義〕 こゝを以て聖人は天下に有爲れども、己が智を恃にして手を下し玉はず、功分成れども、その場に居玉はず、其賢をあらはすことを好み玉はずして、謙遜を旨とし玉ふなり、前に所謂有道者とは、かゝる聖人その人なり、

七十八章

〔章意〕 この章は、通篇柔弱の用を云の結局なり、柔弱とは即温

柔なることなり、武暴になきことなり、謙遜のことなり、固より癡人臆病のことに非ず、後漢の光武帝、我天下を治むる、柔道を以てすと云、此章の旨と符合せり、

天下莫柔弱於水。而攻堅强者。莫之能勝。以其無以易之。

〔解義〕 天下に柔弱なるもの多くあれども、水ほど柔弱なるものはなし、然れども堅強なるものを攻むるに、水に勝るものなきは、水に易ふべきものなく、水にかぎれるによる、木の堅くして切りがたきも、水に浸せば柔かなり、革の強くして断ちがたきも、水に漬せは軟かなり、石の堅きも、水にて穴あき、堤の固きも、水にて壊る、これその強に勝ち剛に勝る様を知るべし、

弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。

〔解義〕 されば弱の強に勝ち、柔の剛に勝つての理は、みやすきことにして、天下人々知らざるものなし、然れども亦能く行ふものなきなり、

是以聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國之不祥。是謂天下王。

〔字訓〕 國の垢とは、よこれなり、みぐるしきなり、王侯自ら孤寡不穀と稱し玉ふ類を、受國之垢と云、社稷主とは、社は土の神を祀り、稷は五穀の神を祭る、この二つ國に於て大切のみやなり、故に社稷の主とは、直ぐに國君のことなり、祥は善と訓す、不祥とは上の垢と云に同じ、只韻により文字を換へ、くり返して云のみ、

〔解義〕 それかるが故に古聖人の金言に曰、己よきものにならんとせずして、その身に國の垢をうけ、自ら孤寡不穀のかずならぬものと名のり玉ひ、身をひき下げ玉ふ人、これを社稷の主にして、尊き一國の君と謂ふなる、その身國の不善を引きうけ、自ら孤寡不穀のよからぬものと名のりて、その身を謙り玉ふ人、これを天下の王と謂ふなる、弱の強に勝ち、柔の剛に勝つこと、如此、

正言若反。

〔解義〕 強の弱に勝ち、剛の柔に勝つ、これ天下衆人の常言なり、弱は強に勝ち、柔は剛に勝つべしと云正論は、常人の云所とは反なり、衆人の耳に入らず、行ふものなきこと宜なる哉、

七十九章

〔章意〕 この章、人の世に處る、勘辨薄く、吟味強くして、人を責め咎むるは、怨をとるの本なり、たゞ從容寛恕にして、よく人を容るべし、これ其一生心安き世を涉り、無難なるべきの道なることをのぶるなり、漢の司馬遷が、伍子胥の舊君へ父を殺せし怨を報せしことをしるして、怨毒の人に於ける、甚しき哉、君の臣に怨まれぬるすら、いかんともすべからず、實に悞るべきものなることをのべたり、釋迦如來云、今世にかすかなる怨も、猶いつまでも消亡せず、未來世にはいとゞはげしき怨となり、生々世々對生して、むくいゝて止む時なしと説けり、章内專怨をとることを戒

む、これ聖賢福難を未然に防がしめらるゝ、深切の明訓なり、

和_二大怨_一、必有_二餘怨_一、安_レ可_レ以_レ爲_レ善_一。

〔解義〕 それ小火は、睡にても消すべけれども、大火となりては、水打ちかけて消し得るとも、必火氣残りて中々熱きものなり、^{以上}發端、人の怨も亦然り、大怨に至りては、たとひ中に扱ふ人ありて、一旦和解して、面を革め、うつくしくみゆとも、心の底はとけやらず、必怨の餘るものなり、これなんぞ善とすべけん、只始めより人の怨なき様にすべきなり、

是以_二聖人執_二左契_一、而不_レ責_二於_レ人_一。

〔字訓〕 契は手形なり、一枚を二つに割り、左契は借りたる者持

ち、右契は貸したる者持ち、左契は引き合はせる爲までの物なり、右契はそれにて責はたるなり、故に執左契とは、人を責めざること云なり、この解、今他説に従ふ、王註と異なり、

〔解義〕 それたゞ始めより人の怨なきにしかず、是を以て聖人の世を涉り玉ふは、人の心の同じからざることは、その面の異なるが如し、いかで我にひとしき人あらん、人の届かぬを見のがし、人の至らざるをきゝすてにして、譬へば物のかりかしに左契を持ちたる者の如く、人を責め咎め玉ふことなし、因て人より怨をうけ玉ふことなく、人の和ぐ心を得て、心安き月日を過ぎ玉ふことなり、

有徳司契。無徳司徹。

〔字訓〕 契は左契のことなり、上文に照して省けるなり、司は頭取るなり、主とすることなり、徹は明なり、人の過惡を目につけ見出すなり、

〔解義〕 有徳人は、その量廣くして、よく人を容れ、左契を持てる如く、人を責めとがめだてし玉ふことなし、無徳人は、勘辨薄く吟味強くして、人のとゞかぬをさがし、人の至らぬを見出すことを主とするものなり、

天道無親。常與善人。

〔字訓〕 與は助くるの意なり、善人は即有徳者のことなり、

〔解義〕 そもく、天道は私なきものにて、誰をとり分け親しみ玉ふことなく、たゞ常に善人を助け玉ふことなり、されば、勘辨

厚き人は、人の怨少きのみならず、天道も亦助け玉ふものなり、

八十章

〔章意〕 この章は、老子周の末に生れ、當時文勝ち事繁く、人貪り求むる風儀となり、終に天下騒がしきに至ることを目撃して、清淨無爲の治を施し、文を止め事を寡くして、上古聖人の時の如く、上下もろ共に和樂せる世に返さんことを思ふてのべたるなり、門人大脇寅之助、國學に精し、嘗て云、國學に所云、全く老子の説に同じと、想ふに我邦神代の昔も、かゝる風儀なるべし、

小國寡民。使有什伯之器而不用。

〔字訓〕 什伯即十百なり、假り用ゐたる字なり、十百の器とは、十

品百品、少しばかりの器物なり、

〔解義〕 世は次第に文勝ち事繁くなりゆきて、昔一つにて足りし器も、後には三つ五つも具へもち、猶それにても足らずとすることにはなれり、かくては物の足るときは、文なく事寡き風俗となり、たとひ土地つまり人民寡く、物事不自由なる處たりとも、人貪り求むる心なきのみならず、その具へ持ちたる纔十品百品の器も、それ猶用ゐるに及ばずして、事足るやうにあらしむべし、

使民重死而不遠徙。雖有舟輿。無所乘之。雖有甲兵。無所陳之。

〔字訓〕 甲兵は、軍兵を云なり、

〔解義〕 それ民は貪り求むるが故に、利のかせぎには死をもいとせずして、住みなれし里をはなれ、海山越えて知らぬ他國へも行くことなれども、今その民をして貪り求むることなからしめて、死を重んじて身を自重、他所他國へ徙ることなからしむべし、それ舟車もて通ふは、求めあればなり、甲兵もて戦ふは、貪ればなり、今は求めなく貪ることなければ、舟車あれども、乗りて外へ行くことなく、甲兵あれども、陳ねて人と戦ふことなからしむべきなり、

使人復結繩而用之。甘其食。美其服。安其居。樂其俗。隣國相望。鷄犬之聲相聞。民至老死不相往來。

〔字訓〕 結繩は易にも出づ、上古は文字なし、約束とは、繩を結びて心覺えとせしばかりなりと云へり、相望とはつゞくことなり、相聞とは至て近きを云なり、

〔解義〕 されば下の風儀をも一變して、民をして事寡く僞少にして、繩を結びて用ゐるのみなれども、その約束に違ふものなく、上代の如き世とならしめ、藜の羹を甘しとし、麻の衣を美なりとし、はにふの小屋を安しとし、野の末山の奥も、住めば都、足れりとして、餘所を羨み思ふ心なく、貪り求むることなければ、隣國相望みて、人の住家程近く、雞犬の吠ゆる聲相聞ゆる程なれども、それなほ年老い身罷るまで、たがひに往來することなく、閑にして安からしむべし、これぞ上代神聖の世のすがたなる、

八十一章

〔章意〕 此章老子一部の結局なり、そもく老子教の主意は、己を修むるに虚を以てし、世を渉るに不争を以てするを第一義とす、故にこれを以て卷尾とす、亦丁寧深切の意なり、

信言不美。美言不信。

〔解義〕 殊に若く容よき人の言うるはしきは、忘れがたく思はるゝものなりと、以上徒然草さはいへ眞實の言は、美しくかさらず、美しくかされる言は、眞實ならざるなり、

善者不辯。辯者不善。

〔解義〕 萬の咎あらじと思はゞ、言すくなからんにしかずと、同されば善者は多辯ならず、多辯者は善者ならざるなり、

知者不博。博者不知。

〔解義〕 一生の内に要とあらまほしからんことを案じ定めて、その外は思ひ棄てゝ、一事を勵むべし、同とも云へば、知者は只我いるべき肝要のことを知りて、その餘の事に博く渉ることはせざるなり、もしいる事いらざる事の分ちなく、取雜博く渉る者は、心外馳して肝要の事に疎し、知者にはさせることはあらざるなり、後世陸象山王陽明の學、朱子を指して支離となし、ただ吾心を主とするの説、知者不博の意に近し、

聖人不積。既以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。

〔字訓〕 不積、舊解、虚のこと、す、吳澄亦同案なり、只下文虚のことにて説きがたし、故に財のこと、す、既に盡なり、

〔解義〕 聖人は己に財を積聚オホクずして、盡く以て人民の爲に用ゐるなり、國は君の國なり、故に國豊なれば即君の豊なるなり、故に己愈多しと云、仁徳天皇の御詞に、民の富めるは即朕の富めるなりとの玉ひたるは、即このことなり、世に稀なる難有御詞なり、唐の陸贄曰、散小儲、成大儲、盡く以て人に與ふるは、散小儲なり、それにて國天下の富むは、成大儲なり、老子戰國の時、聚歛の慘なるをいたみ、卷末に於て、君民一體の義を述べ、其意極めて深切なり、

天之道。利而不害。

〔字訓〕 利は天の物を生じ育て玉ふを云、

〔解義〕 凡そ天の道は、萬の物を利し玉ふのみにて、害し玉ふことばなきなり、されば秋たち冬になり、百の草木のしぼみ落つるも、天の殺氣を施して害し玉ふにはあらず、下より萌はるにたへずして、さきなる葉の落つるなり、たゞ生々して利するのみなるは、これ天地生物の心なり、

聖人之道。爲而不争。

〔解義〕 聖人の道は、無爲を以て爲して、人と争ひ玉ふことなきものなり、争は角ある物の角を觸れ、牙ある物の牙を露す類なり、人にはあるまじきことなり、されば人君己を虚にし物と争

ひ玉はざれば、天下自ら平かなるべきなり、
〔餘論〕 吾儒に云、君子無所争、佛家亦不争と云へる由、今老子こ
れを以て全部の結とす、その旨深矣哉、

老子講義終

大正十一年十月十七日

大正十一年十月十五日改版印刷
大正十一年十月廿四日改版發行

(老子講義)

定價金貳圓

＝有所權版＝

明治十七年三月廿一日版權免許
明治十七年十二月出版
明治二十六年七月廿九日增補再版
明治二十六年八月三日發行
明治四十三年六月廿九日印刷
明治四十三年七月一日發行

著者 佐藤楚材
發行者 奧村金次郎
東京市京橋區中橋和泉町四番地
西村辰五郎
東京市日本橋區檜物町九番地
印刷者 川崎佐吉
東京市京橋區築地二丁目三十番地

發行所

東京市京橋區中橋和泉町 朝陽舍書店
東京市日本橋區檜物町 東雲堂書店
電話本局一八七一番

8
19

終